

Title	問題提起 (<シリーズ>プロフェッショナルの本質)
Author(s)	馬場, 靖憲
Citation	年次学術大会講演要旨集, 16: 506
Issue Date	2001-10-19
Type	Presentation
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/5910
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	シンポジウム

プロフェッショナルの本質

—問題提起—

馬 場 靖 憲（東京大学先端経済工学研究センター教授）

現在、20世紀の産業社会における価値の源泉であったモノは、中国をはじめとするアジア諸国から低価格で供給され、一方、21世紀における価値の源泉たる知識集約産業はアメリカでその姿を現し始めている。このような産業社会の変曲点において、日本産業は過去の成功体験に依拠することはできず、産業の常識はゼロベースから再考され、全く新しい形に生まれ変わらざるを得ない。現実を直視すれば、日本の行政・企業組織のなかに、知識・知見によってものごとの間に新しい関係を発見し、その行動を通じて価値を創造する人間を速やかに育成することが急務となる。

それでは、どのようにして、技術政策、また、技術経営において、時代の鍵を担う人材を育成・獲得することが可能になるのであろう。ここでは、行政、経営に携わる個々人が、そのおかれた立場で真の意味のプロフェッショナル（本職の、くろうとの）になることによってのみ課題は解決され、時代の閉塞が切り開かれる、と考えてみよう。そのようなプロフェッショナルとはいかなる存在で、その本質は何か。現在進展しているグローバル化の結果としてのアメリカへの一点集中が示唆するように、新しい時代のプロフェッショナルの育成のためには、アメリカの教育制度とその実践にみられる理念型（例えば、ビジネス・スクール）の移植が日本に必要なのであろうか。

一方、日本人は従来、熟練と仕事の場の共有により全体像を見ながら部分の仕事をこなし、日本的経営を誇った我々はモノづくりの立派なプロフェッショナルであった。日本の社会にプロフェッショナルを大量に養成してきた文化はどこにいきつつあるのか。発生しつつある一連の日本的雇用慣行の崩壊は何をもたらしつつあるのか。本パネルでは、異なった背景を持ちつつ、共通して問題を理解されている方々にお集まりいただき、激変しつつある日本の産業社会におけるプロフェッショナルの本質について多面的な視点から議論する。